山梨新報「直言」原稿

二〇〇九年五月二九日

「朝敵山梨」の高等教育

山梨県立大学長　伊藤　洋

博覧強記をもって知られる山梨大学教授佐藤正幸さんから、明治から昭和にかけて活躍した反骨ジャーナリスト宮武外骨（1867～1955）の著書『府藩県制史』（1941年刊）について教えられた。それによれば、山梨県のように江戸時代の藩名と県名が異なる県と、鹿児島県や山口県のように一致する県の相違は「永久不滅の賞罰的県名」というルールに従っていたという。すなわち、幕末の早い段階から官軍側についた「忠勤藩」、官軍側に敵対した「朝敵藩」、つくにはついたが遅かった「曖昧藩」という分類によって、県名の命名ルールを違えたというのである。

外骨によれば明治維新時に薩長軍だった藩は藩庁所在地名を県名にし、一方で薩長軍でなかった所は「郡名」などあまり人口に膾炙しなかった名前を命名されている、というのである。

この結果、山梨県をはじめ関東一円の幕府直轄の「天領地」では県名に藩庁所在地名ではなく、郡名または山川草木をもって命名した。つまり、山梨県は甲府県ではなくて「山梨郡」の「梨」であり、茨城県は水戸県ではなくて「若森」から「茨」だったという。

外骨のこの説には異論も多く、その後府県名には随分手が入って詳細に及ぶと煩瑣であるのでこれ以上は触れない。ただ、気にかかるのはこの「朝敵藩」などという呼称である。実はこの「朝敵藩」と呼ばれる多くの府県には旧制高等学校が置かれてこなかったか、設置されたとしても随分後世になってからであった、という動かし難い事実がある。岩手、福島、栃木、群馬、千葉、神奈川、山梨、岐阜、三重・和歌山、富山、福井、滋賀、奈良、鳥取、香川、徳島、大分、宮崎などがこれである。

これら以外にも、設置されるにはされたが後回しの末であった大都市として大阪や名古屋がある。名古屋はナンバー校最後の第八高等学校であったし、旧制大阪高等学校はナンバー校ですらな

かった。両府県とも徳川家ゆかりの地であった。

このように旧制高等学校の設置されなかった地域には、それに代わって職業性を特徴とする専門学校が設置された。盛岡高等農林学校とか、山梨高等工業学校とか、福島高等商業学校の類である。

旧制高等学校がほとんど旧制帝国大学の予備門であったことからすると、旧制高等学校が置かれなかった地域の青年達の進路は陰に陽に狭められていた。勘繰りついでに言わせても無ければ、帝国大学の養成機関であったこと、官吏の養成機関であったことからして、こういう地域の子弟の政府機関への登用を阻止したかったからではなかったかとさえ思われるのである。

かくして近代の山梨では、「士」たる官僚より身分の低いとされた「農工」たる技術者の「工」の道が設えられ、農家の次参男坊を中心に工業分野へ多くの人材を供給している。佐藤教授によれば、このようなことは山梨県だけでなく、国の恩沢はほとんどなかったと言う。それでも、卒業生が「灯りと乗り物」を標榜した「甲州財閥」系企業の中核的技術者となって、その後の繁栄の礎となったのが、地域にとってはせめてもの効用と言えばと言えばなくも無かったのである。

このような歴史を持つ本県の高等教育は相当に歪んだ形で今日を迎えているのではないか。０７年現在、山梨県は人口当たりの大学数が国内第３位となっている。大学の数の多さが地域として高等教育の完備性を意味するのならばよいが、上述の歴史から見ても、地域の必要性に呼応してこれらの大学が自主的にバランスよく設置されたとは思えないことからすれば、誇れる事態とは言い難いだろう。

かくのごとく、地域の高等教育の完備性が不問に付されたまま現在に至っていることからすれば、恐らく地域としての人材養成の需給バランスとも適正さを欠いているこのことが容易に想像されるのである。その結果、本県の学生のほとんどが他地域に流出していくことになって、人口の社会減に繋がるのではないかと想像されるのである。

少子化と全入、生涯学習、地域間競争等々、高等教育自体も大変革の時代を迎えている。「朝敵山梨」の地域政策に、歴史を上初めて高等教育政策を論ずべき時代が来ているのではないだろうか。